

みうら学・海洋教育ネットワーク通信 NO.20

令和5年12月21日

海洋教育写真コンテスト入賞作品の紹介⑥

優秀賞 初声中学校 3年 鈴木 延造 さん 「海のスイカ～泡沫を添えて～」



【ひとこと】

引き潮によってできた潮だまりに入っていたクラゲです。白い粒々のようなものが泡で、水面へと昇り、無情にも消えていきました。

【講 評】

美しいクラゲと消えゆく泡沫のコントラストが絶妙な一枚です。弱って浜に流れ着いたと思われるアカクラゲを大きく、少し右に寄せて撮影した構図が、クラゲのゆらゆら感を引き立てています。

東京大学三崎臨海実験所特別賞

三崎小学校 5年 石井 辰ノ助 さん 「これがフナムシの現実」



【ひとこと】

いつも逃げるフナムシが集まっていたのでよく見たら共食いしていた。ひどいとおもいました。

【講 評】

生き物の世界の現実をうまくとらえています。このような珍しい瞬間を撮影することに成功したのは、フナムシの行動をよく観察していたからこそではないでしょうか。スポットライトが、暗闇で驚きの光景を発見してしまった雰囲気を見事に演出しています。

櫻井正則の会特別賞 初声中学校 2年 大井 蓮 さん 「明日も、がんばろ。」



【ひとこと】

自分はよくここに、つかれている時にいって、景色や、音を楽しむんですが、その時にこの景色を見て、めっちゃ感動して、明日もがんばろって思えました。

【講 評】

海に沈む夕日、それが空や海に映す光がとても美しいです。手前の小型船も三浦らしさを表現することができています。この美しい景色は、撮影者だけでなく、たくさんの人を感動させ、勇気づけてくれるのではないのでしょうか。

みうら学・海洋教育に関するお問い合わせは、

学校教育課まで 046-882-1111（内線404）

みうら学・海洋教育ネットワーク通信 NO.19

令和5年12月21日

海洋教育写真コンテスト入賞作品の紹介⑤

優秀賞 南下浦中学校 2年 望月 タ杏 さん 「宝物の風景がある洞窟」



【ひとこと】

洞窟に西日が差し込んで、外の青い海、空と洞窟の中の石のコントラストがとてもきれいで、まるで絵画を見ているようでした。

【講評】

洞窟のゴツゴツした岩と、美しい空と海と西日のコントラストが見る者を魅了する一枚です。洞窟から海を写すことによって、その先に広がる海と空に無限の広がりを感じさせます。撮影者にとって、この風景こそが宝物だったのではないのでしょうか。



優秀賞 初声中学校 2年 宇田川 晴貴 さん 「まぐろの水揚げ」

【ひとこと】

水揚げするところを撮れたことが良かった。

【講評】

思わず、「大漁！大漁！」と声を上げたくなる一枚です。クレーンで釣りあげられるマグロを、大きく切り取って撮影することで、迫力のある作品に仕上がっています。三崎の港の醍醐味を写し出してくれていますね。

優秀賞 初声中学校 2年 船奥 彩愛 さん 「馬の海水浴」



【ひとこと】

タイミングが合わないと馬が海に入る光景はみることができないので、写真に残せて良かった。

【講評】

なかなかシャッターチャンスのない瞬間をとらえた、見事な一枚です。青い海の中を歩く馬たちの美しいボディのコントラストが印象的です。今年の夏はとても暑い日が続いたので、きっと馬たちも気持ちよかったことでしょう。

みうら学・海洋教育に関するお問い合わせは、

学校教育課まで 046-882-1111（内線404）

みうら学・海洋教育ネットワーク通信 NO.18

令和5年12月21日

海洋教育写真コンテスト入賞作品の紹介④

優秀賞 初声小学校 3年 菅原 仁 さん 「カニとジャンケン」



【ひとこと】

大きいカニだったので、つかまえるのがたいへんでした。

【講 評】

撮影者が一生懸命つかまえた、大きなイボイワオオギガニ。カニの方もどこか必死で、体全体に力が入っている感じのする、とてもパワフルな一枚です。ジャンケンの結果は、どちらが勝ったのでしょうか。

優秀賞 初声小学校 3年 鈴木 琉仁 さん 「矢作のクモハゼ」



【ひとこと】

魚の青い点がきれいにとれたこと。

【講 評】

クモハゼの細部まではっきりと写し出された一枚です。磯によくいるクモハゼですが、近づいてよく観察すると、青い点や模様が美しく、そこによく気付いたと思います。今にも動き出しそうですね。



優秀賞 三崎中学校 1年 國領 美月 さん 「パイレーツ・オブ・コアジリアン」

【ひとこと】

船と海の組み合わせが、海賊がいそうな景色でとても綺麗でした。

【講 評】

映画のポスターのような、美しく神々しい情景を写した一枚です。低い位置から空に向かって写しているところが、海賊船が夕陽に向かって航海に出ていく雰囲気を表しています。船長はどんな人なのでしょう。

優秀賞 南下浦中学校 1年 戸叶 ななら さん 「仕事見学」



【ひとこと】

父がよくヨット作業をするシーボニアマリーナへ見学に行ったら、ヨットの底の掃除をしていました。

【講 評】

メンテナンスのために陸に揚げたヨットの船底を、ダイナミックに写し出した一枚です。海で仕事をする人たちの、海上以外での、裏側の仕事を上手に伝えてくれていますね。きれいになったこのヨットが、力強く海に行く姿を想像させてくれます。

みうら学・海洋教育に関するお問い合わせは、

学校教育課まで 046-882-1111（内線404）

みうら学・海洋教育ネットワーク通信 NO.17

令和5年12月7日

海洋教育写真コンテスト入賞作品の紹介③



優秀賞 旭小学校 4年 千葉 倫太郎 さん 「冬のダイコンと夕陽」

【ひとこと】

ぼくの家のだいこんをコンテストのために冬にさつえいしました。これからタクアンになるダイコンです。

【講評】

写真コンテストのために、あえて冬に撮影しておいたそうです。撮影者の意気込みが伝わります。三浦に住んでいるからこそ見ることのできる、ダイコンと三浦の町並み、そして夕日が大変美しいですね。



優秀賞 剣崎小学校 6年 鈴木 大雅 さん 「海の夕日」

【ひとこと】

気に入っているところは、海に夕日がかかっているところが気に入っています。

【講評】

夕方の静かな海の雰囲気がよく表れた一枚です。海と空のバランスがすばらしく、さらにはバックの夕日も三浦の海岸を上手に表現できていますね。夕日が海を染めているところが、撮影者のお気に入りポイントだそうです。



優秀賞 初声小学校 2年 松井 海瑠さん 「だいじゅうたい」

【ひとこと】

たいがたくさんおよいでいるところ。

【講評】

たくさんのマダイが畜養生け簀の中で元気よく泳ぐ様子が、正に「だいじゅうたい」ですね。写真の様子にぴったりなタイトルが大変秀逸です。一体何匹のマダイがここに写っているのでしょうか。

みうら学・海洋教育に関するお問い合わせは、

学校教育課まで 046-882-1111（内線404）

みうら学・海洋教育ネットワーク通信 NO.16

令和5年12月 7日

海洋教育写真コンテスト入賞作品の紹介②

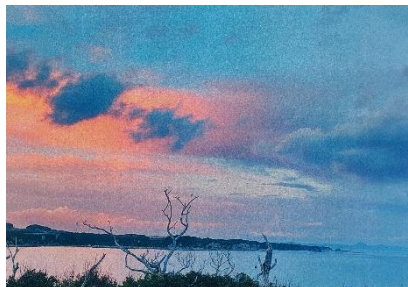
優秀賞 南下浦小学校 6年 石原 周 さん 「マジックアワー」

【ひとこと】

城ヶ島公園に遊びに行った時の帰りに、きれいな景色だと思い写真を撮りました。明るい所と暗い所の分け目がきれいです。

【講 評】

夕方の空が焼けるタイミングをうまく撮影することができています。空の明るさと暗さの分け目が、この時間帯のなんともいえない空気感を伝えてくれます。そのような感じが、オシャレなタイトルにも表れているのではないのでしょうか。



優秀賞 上宮田小学校 4年 古泉 陽渚 さん 「カラフルな朝日と海」

【ひとこと】

空もカラフルだったし、海もきれいだったからこれをえらびました。

【講 評】

美しい空、静かな海、落ち着いた砂浜のコントラストがとても素敵な一枚です。朝日と空と雲によって、こんなにもカラフルな情景が映し出されるのですね。早朝の三浦海岸でこんな素敵な写真が撮れた時の感動が伝わります。



優秀賞 上宮田小学校 4年 神保 千実 さん 「どうして？海にいるちょう」

【ひとこと】

チョウが海にいて、おいかけても逃げるだけで海からはなれませんでした。家で理由をしらべると、ミネラルを取るために水をのむのはオスだけということがわかりびっくりしました。

【講 評】

本来、海にいないと思っていたチョウが海にいるという不思議な瞬間を収めた一枚です。この「どうして？」を撮影者が調べてみると、「ミネラルを取るためにオスだけが水を飲む。」ことがわかったそうです。こうした「どうして」を大切にしてほしいですね。



みうら学・海洋教育に関するお問い合わせは、
学校教育課まで 046-882-1111（内線404）

みうら学・海洋教育ネットワーク通信 NO.15

令和5年12月7日

海洋教育写真コンテスト入賞作品の紹介①

最優秀賞 名向小学校 2年 木澤 英菜 さん 「三うらの海のほう石」



【ひとこと】

うみうしのおしりのふりふりがかわいかった。

【講 評】

小さな貝の中に、さらに小さなアオウミウシ。貝殻の内側の輝きと、ウミウシの鮮やかな色合いのコントラストが大変美しいです。よくぞこのウミウシを発見できたということも含めて、タイトルの通り、まさに「三うらの海のほう石」を思わせる一枚です。

最優秀賞 南下浦中学校 1年 橋本 和奏 さん 「三浦海岸の朝焼け」



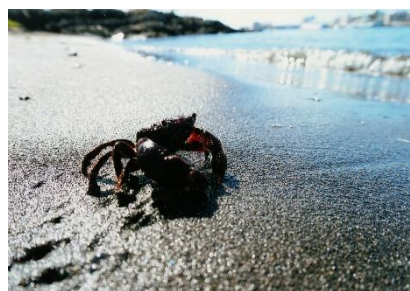
【ひとこと】

色と雲の形、海も空と同じようにオレンジになっていてきれい。

【講 評】

太陽の光が、空と海、全体に広がっていてとても美しいです。朝日が美しいことはもちろんですが、その朝日によって赤く染まる海がまた美しさを感じさせます。様々な形の雲と相まって、空の色がグラデーションのようにになっているのもまた美しいですね。

優秀賞 岬陽小学校 3年 海沼 颯登 さん 「ワーイ かいすいよくだ！」



【ひとこと】

かにのあしあとがきにいつている。

【講 評】

タイトルの通り、「ワーイ かいすいよくだ！」と、カニが喜んで海に向かって歩いているかのような感じが伝わってきます。波、カニ、足あとのバランスがまた絶妙であり、その一瞬を見事にとらえた一枚です。



優秀賞 名向小学校 5年 植田 一 さん 「ゆうがなイカ」

【ひとこと】

光の感じがきれい。

【講 評】

水と光とイカのバランスが絶妙で、まるで芸術作品のようです。イカが気持ちよさそうに、優雅に泳ぐ姿がとてもかわいらしいですね。このような小さな生き物を発見できたのは、撮影者の海の生き物への興味からなのではないでしょうか。

みうら学・海洋教育に関するお問い合わせは、

学校教育課まで 046-882-1111（内線404）

みうら学・海洋教育ネットワーク通信 NO.14

令和5年11月30日

令和5年度 第12回海洋教育写真コンテスト表彰式が行われました



11月7日（火）に、三浦市民ホールで令和5年度第12回海洋教育写真コンテストの表彰式が行われました。今回は応募総数976点の中から、最優秀賞2点、優秀賞16点、特別賞2点の計20点の作品が選ばれました。星野代表理事のあいさつの後、表彰が行われ、入賞者は緊張した面持ちでステージに上がりました。



表彰の後には、東大三崎臨海実験所の小口特任助教と、海洋教育担当校長である剣崎小学校の五十嵐校長による作品紹介が行われました。最後に、東京大学三崎臨海実験所の三浦所長より、「写真だけでなくタイトルやコメントも面白く、楽しく審査することができた。素晴らしい自然環境がある中で育つ三浦の子どもたちがうらやましい。」との言葉をいただきました。会場入り口には入賞作品が展示され、来場者の注目を集めていました。次号より入賞作品の紹介をしていきます。



南下浦小学校と剣崎小学校3,4年生が交流磯観察



9月13日（水）に、南下浦小学校と剣崎小学校の3,4年生が、江奈湾で磯観察を行いました。令和7年度に統合する2校の交流の一環です。

まずはグラウンドで、剣崎小学校の子どもたちの進行により開会式を行いました。先生の紹介、校長先生のあいさつの後、2校の児童の交流グループごとに、各自手作りのプロフィールのカードを交換し、交流を深めました。



磯に向かうと、いよいよ磯観察です。グループごとに生き物を観察しました。岸から離れた岩場では、毎年海洋教育写真コンテストの被写体として人気の、大きなイボイワオオギガニを見つけた子どもがいて、歓声が上がっていました。一方、人が大勢いる岩場から離れ、岸に近いところで観察しているグループの様子を見に行くと、イソガニやタイワンガザミの子どもなど、たくさんの生き物を捕まえています。先生たちは、「生き物がいる場所をよく知っているんだね。」と感心していました。



みうら学・海洋教育に関するお問い合わせは、

学校教育課まで 046-882-1111（内線404）

みうら学・海洋教育ネットワーク通信 NO.13

令和5年10月19日

南下浦中学校の1年生が矢作海岸で観察会



9月12日(火)、南下浦中学校の1年生が校外学習に行きました。理科的視点グループと社会的視点グループに分かれ、各自活動을します。このうち、理科的視点グループは、矢作海岸で磯の生き物観察を行いました。秋の磯は海藻が枯れて、見られる生きものが少なくなりますが、ムラサキウニやヒライ



ソガニ、ホンヤドカリ、アオウミウシなど、磯観察では定番のメンバーが観察できました。カメノテを採集した生徒がいたので、生き物の解説の時間で、「ウニ、貝、カニのなかではどれに近い仲間だと思いますか？」と質問してみると、貝とカニで半分ほどに意見が分かれました。正解はカニと同じ節足動物で、卵からはエビのような形をしたノープリウス幼生が孵化します。これが海中を漂って移動し、やがて岩のすき間などに付着します。中学では体のつくりの違いによる分類など、一歩踏み込んだ視点で観察をするとより学びが深まると思います。

9月6日「湘南丸の船内見学」小学生のアンケートより

回答者：三崎小学校、岬陽小学校、名向小学校3年生 計64名

◇特におどろいたり、ふしぎだと思ったりしたこと

- ・ 船には海の地図があること。 ・ マグロを獲るのにハワイまで行くこと。
- ・ 予想より船が大きかったこと。 ・ マグロが-60℃で凍っていることがおどろいた。
- ・ 海水を飲める水にできるのがすごかった。 ・ 朝4時から漁を始めること。
- ・ 「はえ縄漁」について、はじめはよくわからなかったけど、説明を聞いたらすごいと思った。
- ・ マグロ以外にも、マンボウ(アカマンボウ)やサメがとれること。 ・ 船には〇〇丸と名前が付くのはなぜ？
- ・ ゆかの下に燃料タンクがあること。 ・ 機械の部屋がすごく暑いこと。 ・ ハンドルが思ったよりちっちゃかった。



◇今回の見学の感想

- ・ 案内をしてくれたお兄さん、お姉さんがやさしかった。 ・ いっぱい海のことを覚えることができてよかった。
- ・ 船に乗っている人たちは24時間働いてすごいなと思った。 ・ いろいろな部屋があって迷子になりそうだった。
- ・ 2か月も船に乗りっぱなしですごいなと思った。 ・ 船をどうやって造るか教えてほしい。
- ・ 船の中は意外と広くて間違えそうだったけど、一つ一つの部屋に意味があるんだなあとと思いました。
- ・ 実際に(マグロを)釣っているところを見てみたい。 ・ マグロの生態をもっと知れてよかった。
- ・ マグロに関するクイズが楽しかった。 ・ マグロの獲り方、釣り方がわかった。
- ・ 三浦のマグロは三浦ではなく遠いところからはるばる釣ってきてくれているんだと感謝の気持ちが高まった。

* 海洋科学高校に進学したいという感想を書いた児童も何名かいました。貴重な体験をありがとうございました。



みうら学・海洋教育に関するお問い合わせは、

学校教育課まで 046-882-1111 (内線404)

みうら学・海洋教育ネットワーク通信 NO.1 2

令和5年10月10日

海洋レジャーに挑戦 シーボニアで海洋アカデミー



9月7日(木)に、岬陽小学校の5, 6年生が、リビエラリゾートの海洋アカデミーに参加しました。開校式で海に関する安全と、ライフジャケットの着用についてレクチャーを受けた後、ボートで小網代湾に浮かぶ栈橋に移動しました。ここからは3グループに分かれ、ハンザディンギー、シーカヤック、小網代湾クルージングを交代で体験します。クルージングではモーターボートで小網代湾の奥まで行き、海の上から小網代の森を眺めた後、沖に向かい進みました。小網代湾を抜けるとボートはスピードを上げます。子どもたちはその速さに驚いていました。湾内と沖では波が変化する感じが感じられました。ハンザディンギーは2人乗りのヨットで、風を動力にします。帆の角度と舵、そして体重の移動で操船し、風に対して斜めに向かうことで風上の目的地にも進めます。説明を聞いた後、子どもたちは2人1組のバディでディンギーに乗り込み操船をしますが、当日は風が弱く、なかなか思い通りに進みません。しかし慣れてくると舵取りと帆の操作、重心移動の息が合ってきたようで、時々吹く風をうまく掴んで操っていました。シーカヤックも2人のバディで乗り、力を合わせてオールを漕ぐことで進みます。ディンギーは風が弱いと進めませんが、シーカヤックは風が弱い方が操船しやすく、子どもたちはすぐに乗りこなしていました。風が強いと、風上に向かって漕いでも押し戻されてしまうそうです。今回の海洋アカデミーで、子どもたちは機械、風、人力で航行する体験ができ、それぞれの魅力を感じていました。最後に、講師の方から「マリンスポーツは自然の中で遊ぶため、楽しい反面危険も伴う。天候の変化や機材の扱い、体調管理などに注意して、事故の無いように安全に楽しんでほしい」との言葉を受けました。



大きく育ってね！小網代港でマダイの放流



9月11日(月)、小網代パール海育隊(小パール隊)の協力により、名向小学校の3年生と南下浦小学校の3, 4年生合計47名が、神奈川県栽培漁業協会にて育てられたマダイの稚魚約1500匹を小網代湾に放流しました。まずは、栽培漁業協会の今井専務理事から、マダイの生態や成長過程、小網代の自然についての話がありました。子どもたちは生まれたばかりのマダイの仔魚の小ささや、その後の成長の速さに驚いていました。また、養殖と天然のマダイの見分け方(鼻の穴の数が異なるそうです)にはみんな興味津々でした。話が終わるといよいよ稚魚の放流です。体長10cmほどのマダイが数匹入ったバケツを受け取ると、放流用の木製のスロープの脇に立ちます。準備ができると栽培漁業協会の方の掛け声で海に流しました。海に放たれた稚魚に、子どもたちは「元気だね!」と声をかけていました。



みうら学・海洋教育に関するお問い合わせは、

学校教育課まで 046-882-1111 (内線404)

みうら学・海洋教育ネットワーク通信 NO.1 1

令和5年10月5日

親子でチャレンジ 名向小学校で真珠の浜揚げと核入れ体験



9月4日(月)、名向小学校の5年生が、真珠の浜揚げと核入れに取り組みました。講師は小網代パール海育隊(小パール隊)のみなさんです。また、今回は初めて保護者にも参加していただきました。



小パール隊の出口理事長のあいさつのあと、まずは浜揚げ体験(アコヤガイから真珠を取り出す作業)を行いました。アコヤガイを開くためのナイフの使い方や真珠の探し方を教わり、親子で慎重に貝を開けていきます。しばらくすると真珠が見つかったようで、あちこちから歓声が上がっていました。真珠の核の周りに巻かれる層と、貝殻の内側は同じ成分でできているということに、子どもたちだけではなく大人も驚いていました。浜揚げ体験のあとは、子どもたちが核入れに挑戦しました。核入れはアコヤガイの体の

中に、核と外套膜の細胞片(ピース)を挿入する、難易度の高い作業です。1人につき2つのアコヤガイに核入れを行いました。はじめは小パール隊のスタッフの手を借りながら、慎重に核を入れていきますが、2つ目になると、コツをつかんだのか1人でスムーズにできる子どももいました。保護者の皆さんは、子どもたちが真剣に取り組む様子を観ていました。今回核入れしたアコヤガイは小網代湾で育てられ、来年の秋～冬に浜揚げされます。



三崎のマグロはどうやって獲っているの？湘南丸の見学



9月6日(水)に、三崎小学校、岬陽小学校、名向小学校の3年生合計64名が、県立海洋科学高校の「湘南丸」の見学に行きました。船内の施設見学と、遠洋航海実習やマグロ漁について学ぶ海洋学習をします。海洋科学高校の教官のほか、専攻科の学生さんも施設の案内をしてくださいました。湘南丸は全長 65.4m、総トン数 696 トンの実習船で、はえ縄漁でマグロを漁獲します。遠洋航海実習では、船員・教官・学生約80名が、2か月ほど生活しながら操業を行うため、航行や漁業の設備のほかにも、洗濯場、風呂場など、居住するための設備が船内に配置されています。機械室には、航行用のエンジンのほか、船で使う電気を作る発電機や、海水を真水にする装置があり



ります。階段を上がるとブリッジと無線室があり、船を操縦する装置や、洋上から陸に通信をする設備を見学しました。大きな船にもかかわらず、ハンドルは車とあまり変わらないサイズだということが不思議だったようです。甲板では、大きな釣り針のついたはえ縄の枝縄を見せてもらいました。枝縄を付ける幹縄は約90kmもあるそうです。今回の見学で、子どもたちは、三崎のマグロが何か月もかけて世界中の海で漁獲され、三崎港に水揚げされていることを知りました。マグロのことや船のことを、もっと知りたいと思った子どももいたようです。海洋科学高校のみなさま、ありがとうございました。



みうら学・海洋教育に関するお問い合わせは、

学校教育課まで 046-882-1111 (内線404)

みうら学・海洋教育ネットワーク通信 NO.10

令和5年9月11日

逗子・三浦・葉山の初任教員が城ヶ島で研修会



8月9～10日(水・木)、逗子・三浦・葉山の合同初任者夏季研修が開催されました。初日は城ヶ島で株式会社三崎恵水産の見学と、地層の巡検を行いました。



三崎恵水産では、はじめに石橋匡光社長から「まぐろ経済学」の講義を受けました。まぐろ経済学とは、まぐろを中心に世界の環境や社会問題を経済的視点から考える、石橋社長の造語です。現在、世界的にマグロの需要が高まっています。マグロは外洋を広く回遊するため、漁獲する各国が適切に資源管理を行っていくことが重要です(近年では太平洋のクロマグロは増加傾向にあるようです)。恵水産では環境負荷の少ない漁法で漁獲されたマグロを仕入れているとのことでした。また、マグロの保存には超低温の冷凍庫が必要ですが、自社工場に設置した太陽光発電と、購入

する電気の使用量を調整することでコスト削減に成功したそうです。他にも非可食部位をペットフードに加工する試みなど、環境対策と経済効果を両立し、50年後も美味しいまぐろを提供できる企業を目指しているそうです。加工場の見学では-60℃の冷凍庫の中に入りました。



暑い日でしたが、一瞬で凍えるような寒さを体験し、参加者からは「寒い！」と声が上がっていました。恵水産を出ると、



次は城ヶ島の西岸、長津呂崎で地層の巡検です。城ヶ島は海洋プレートが大陸プレートに潜り込む際に、海底火山が陸に衝突してできました。さらに海岸は波や風で侵食され、地層が露出しています。そのため様々な地質構造を観察することができます。長津呂崎では、12

00万年前に堆積したとされる三崎層の褶曲や火炎構造、スランプ構造などが見られ、参加者はダイナミックな地球の活動を感じていました。

1年経験者がみうら学・海洋教育カリキュラムを考えました 第3回みうら学研究会

8月23日(木)に第3回みうら学研究会兼1年経験者研修が開かれました。今回は、前回岬陽小学校で行われた研究授業を参考に、研究員がみうら学・海洋教育カリキュラムを考案しました。取り組むテーマは次の通りです。

- ・ 岬陽小学校 藤田先生 「伝えよう！東京湾に住む生き物」
- ・ 上宮田小学校 行谷先生 「海の生き物図鑑を作ろう」
- ・ 旭小学校 高梨先生 「もっと知りたいわかめのこと」
- ・ 初声小学校 今先生 「海洋プラスチック問題」
- ・ 初声小学校 長井先生 「さかなクンになろう！ ～うみのかくれんぼ～」
- ・ 三崎中学校 内田先生 「アジアをつなぐ獅子の舞～海南神社夏例大祭の獅子舞と諸外国の比較鑑賞～」
- ・ 南下浦中学校 池中先生 「みうら観光大使をめざそう」
- ・ 初声中学校 青野先生 武道 「相撲」
- ・ 初声中学校 村田先生 「表現を工夫し、短歌を作ろう」

それぞれの先生が現在の授業素案と経過を発表し、質問や意見を受けました。他の研究員のいろいろな考えを聞いて、刺激を受けたようです。また、藤田先生がみうら学研究員の代表として授業を行うことも決定しました。

みうら学・海洋教育に関するお問い合わせは、

学校教育課まで 046-882-1111 (内線404)

みうら学・海洋教育ネットワーク通信 NO.9

令和5年8月24日

大きな魚に大興奮 姉妹都市交流会



7月28、29日に、三浦YMCAグローバルエコヴィレッジで、姉妹都市である長野県須坂市の子どもたちを迎えて、三浦の子どもたちとの合同宿泊を行いました。本行事は4年ぶりの開催です。



1日目、まずは「交歓会」を開催しました。市長からは「須坂のみなさんにお越しいただけたことは大変嬉しく、海のまちである三浦市を肌で実感して楽しんでもらいたい」との言葉をいただきました。各市の代表の子どものあいさつなどもあり、和やかな雰囲気の中で合同宿泊がはじまりました。



続いては、三浦の海について紹介する「海洋学習」の時間です。講師として長井漁港で漁師をしている、白鷹丸の仲地慶祐さんを迎えました。仲地さんは刺網でイセエビなどを獲るほか、素潜りや釣りでも漁を行っています。今回は漁で実際に使っている刺網を見せてくれました。また、漁の面白さや大変さ、近年の海の変化についても教えてくれました。講義のあとは、仲地さんが獲った生き物のふれあい体験です。当日の朝水揚げしたばかりのインダイやコロダイ(どちらも重さ3kg以上もある大物です)と、カニやヤドカリ、ウニ、タコなどのタッチプールを用意してくれました。須坂の子どもたちは、大きな魚を間近で見るのは初めてのようで、その大きさや重さ、手触りやにおいなどを体感していました。タッチプールには、三浦周辺では珍しいアサヒガニ(右下の写真)も入っていて、不思議な見た目に興味津々でした。見かけによらず非常に美味しいカニで、市場では高値で取引されます。2日目には油壺に移動し、磯の観察会や東京大学三崎臨海実験所の見学を行うなど、三浦の海を満喫した2日間でした。なお、8月8、9日には、三浦の子どもたちが須坂市を訪問し、様々な体験を通じて須坂の子どもたちとの交流を深めました。

湘南丸で海に出よう！ 三浦市こどもの船



8月4日(金)に第41回三浦市こどもの船が開催されました。市内の小中学生29名が参加し、神奈川県立海洋科学高等学校の実習船「湘南丸」に乗船し、体験航海を楽しみました。



市民ホールで行った出港式では、船内見学の案内と研修をしてくださる先生や生徒さんの紹介のほか、乗船にあたっての注意事項や、救命胴衣の着用方法を教えていただきました。



花暮岸壁に移動すると、いよいよ出航です。海は少し荒れていましたが、大きな湘南丸はほとんど揺れず、順調に沖に出ます。船上では、湘南丸での実習や近年の海洋環境について学ぶ「海の学習」と、船内の設備を紹介する「船内見学」、航海中に行う「海洋観測」の実演を見学しました。湘南丸は2か月にわたる遠洋航海実習で、マグロはえ縄漁が行われていますが、その間の生活を送るために様々な工夫がされていました。参加者には海洋科学高校で製造した、組み紐のキーホルダーとクロカワカジキのオイル漬けをお土産にもらい、子どもたちは大喜び。下船する頃には、「海洋科学高校に進学したい!」と思った子どももいたようです。

みうら学・海洋教育に関するお問い合わせは、

学校教育課まで 046-882-1111 (内線404)

みうら学・海洋教育ネットワーク通信 NO.8

令和5年8月10日

他の海岸との違いを調べよう 矢作海岸探検



7月3日(月)、初声小学校の3年生が矢作海岸探検に行きました。当日は潮もよく引いていて、生きものの観察には最適です。渡邊先生と辻先生から観察の注意点を聞いた後、グループに分かれて生き物を探しに行きます。見つけた生き物は先生に写真を撮影してもらい、学校に帰った後で振り返ります。矢作海岸は一番川の河口に位置するため、汽水域(淡水と海水が混ざる場所)に住む生き物が見られます。今回の観察では、タイワンガザミ(右下の写真)を見つけた子どもがいました。5本目の脚がオールのようになっていて、水中を泳ぐことができます。ウニやヒトデの仲間も多く見られ、くねくねとよく動くクモヒトデには子どもたちも興味津々でした。魚の仲間では、まだ体が半透明のニザダイの幼魚(右上の写真)や、イソハゼ、ナベカなどが見られました。今後は学区内の他の海岸や、市内の海岸との相違を考えていこうです。



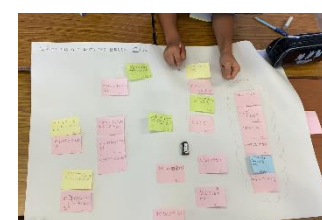
三崎マグロについて調べていきます 三浦のよさ発見隊！



7月6日(木)に三浦市学校教育研究会海洋教育部会兼みうら学研究員会兼1年経験者研修で、岬陽小学校の3年生の総合的な学習の時間の授業を視察しました。授業者は宇都宮洋子先生でした。



この学年は、「三浦のよさ発見隊！」として、三崎マグロについて調べていこうです。今回の授業では、「三崎マグロ」について知りたいことを考え、ブレインストーミング法を用いて自分の考えを班で共有しました。まず、宇都宮先生がマグロについて子どもたちが知りたいことを質問すると、どこで獲れるのか？大きさは先生より大きいのか？などといったことから、冷凍マグロの加工につ



いてなど、三浦の子どもならではの質問も挙がっていました。次に、各自が知りたいことを付箋に書きこみ、班ごとに模造紙に貼り付けました。似たような内容の仲間分けをすると、自分の考えていなかった質問も挙がっていることに気づきます。今後は、お互いの意見を確認して、知りたいことを調べていこうです。

授業終了後、参加した教員で協議が行われ、

- ・初めに先生から質問をして、児童が知りたいことを膨らませやすい雰囲気にしたのが良かった。
 - ・付箋を個人で色分けすることで、誰の質問なのかなどをわかりやすくしたのは良かった。
 - ・今後、似たような質問を持っている子どもたちで班を再編成するのか、このままの班で続けるのか、検討が必要。
- といった感想、意見が出されました。1年経験者は今回の授業を参考に、海洋教育のカリキュラムを考えていきます。

みうら学・海洋教育に関するお問い合わせは、

学校教育課まで 046-882-1111 (内線404)

みうら学・海洋教育ネットワーク通信 NO.7

令和5年7月27日

力を合わせて生き物探し 剣崎小学校、南下浦小学校の交流磯観察会



6月20日(火)、剣崎小学校と南下浦小学校の1年生が、江奈湾の磯の観察会をしました。令和7年度に統合を予定している2校の交流の一環です。まずはグラウンドに集合して、あいさつとお互いの自己紹介をしました。初対面の子どもたちは、少し緊張しているようです。あいさつの後は、剣崎小学校の目の前の磯に全員で歩いていきました。剣崎小学校の子どもたちは、4月に6年生と来ているので、先導して歩いていきます。磯に着くと、2校の児童の交流グループに分かれ、グループごとに観察を始めました。南下浦小学校の近くにも磯がありますが、江奈湾の磯は内湾で、泥干潟が近くにあるので、見られ



る生物が少し違います。子どもたちは砂泥に住むマメコブシガニや、ゼリーのようなゴカイの仲間の卵塊に興味津々。しばらくすると子どもたちも慣れてきたようで、力を合わせて大きな石をひっくり返して生き物を探していました。短い時間でしたが、南下浦小学校の子どもたちは、剣崎小学校の学区の中にすばらしい自然があることを体験できたと思います。次回は剣崎小学校の子どもたちが南下浦小学校に交流に行くそうです。

マリンパークのメガマウスが見られます 科博の特別展「海 -生命のみなもと-」



東京・上野公園の国立科学博物館で、特別展「海 -生命のみなもと-」が2023年7月15日～10月9日まで開催されています。この特別展では、私たちの身近にありながら、水の惑星・地球の象徴であり、生命のみなもとである海の誕生から現在について、多様な生物や人と海の関わりを紹介し、海と歩む未来についても考えています。「海と生き物のつながり」のコーナーでは、2021年に閉館した、京急油壺マリンパークで展示されていたメガマウスの剥製も展示されています。また、昨年度多くの学校で取り組んでいた海洋ゴミについての展示も充実していました。三方を海に囲まれた三浦市は、海と密接に関わって発展してきました。ぜひ会場に足を運んで、海について考えてみてはいかがでしょうか。



みうら学・海洋教育に関するお問い合わせは、

学校教育課まで 046-882-1111 (内線404)

みうら学・海洋教育ネットワーク通信 NO.6

令和5年7月13日

2年ぶりの開催 南下浦小で海藻おしば教室



6月19日(月)、南下浦小学校の3, 4年生が、日本海洋レジャー安全・振興協会の主催、海藻おしば協会の指導による海藻おしば教室を体験しました。海藻おしば教室は、三浦の小中学校では2年ぶりの開催です。

講師は先日岬陽小で行った万華鏡教室と同じく、海藻おしば協会の高山先生です。まずは体育館で海藻についての講義と、おなじみの映像「ようこそ海の森へ」を視聴しました。海の世界の食物連鎖の説明では、先生にイラストを持っていただきました。海藻は太陽の光で養分を作り、育った海藻をウニが食べて・・・といった仕組みを、子どもたちは真剣に聞いていました。講義の終わりに海藻おしばの作り方を聞きました。きれいなおしばを作るコツは、海藻をよく広げること、海藻どうしが重なりすぎないようにすることだそうです。



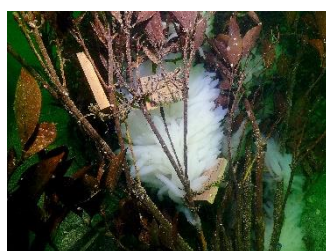
教室に戻ると、いよいよ海藻おしば作りです。あらかじめ準備したはがきに海藻をならべて、思い思いの作品を作ります。スムーズに作る子どももいれば、イメージ通りに仕上がらないのか、一からやり直す子どももいます。乾燥しなければ何度もやり直しができるのも海藻おしばの良いところです。このように



して完成した作品は、布とボール紙で挟んで乾燥させます。乾燥には時間がかかるため、おしば協会の方が持ち帰り、何度も紙を交換して仕上げてくださるそうです。完成した作品が子どもたちのもとに返ってくるのが楽しみです。

卵塊がたくさん産み付けられていました 諸磯に設置したアオリイカ産卵床のその後

6月15日、諸磯藻場保全活動組織の本間さんが、藻場の潜水調査を行った際、4月に名向小学校の6年生と設置したアオリイカ産卵床の確認をしたそうです。その時の産卵床の様子を写真で送ってくださいました。産卵床に使ったマテバシ



イの枝に白い花が咲いているように見えるのは、すべてアオリイカの卵塊(卵が連なって産み付けられたもの)です。子どもたちの思いが通じたのか、多くのアオリイカが産卵床を利用してくれたようです。ここから新たな命が誕生し、1年後、大きくなったイカが諸磯の海に戻ってきてくれることでしょう。一方で、これほどの密度で産卵床が利用されるのは、本来産卵をする場所である藻場が、大きく減少して



いるということです。藻場を再生することの重要性を、改めて感じました。

* 写真はすべて諸磯藻場保全活動組織の本間さんに提供していただきました。ありがとうございます。

みうら学・海洋教育に関するお問い合わせは、

学校教育課まで 046-882-1111 (内線404)

みうら学・海洋教育ネットワーク通信 NO.5

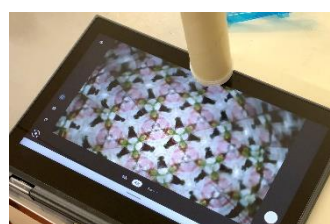
令和5年7月6日

神奈川県には何種類の海藻がある？岬陽小で海藻万華鏡教室

6月8日(木)、岬陽小学校の6年生が、海藻万華鏡教室を体験しました。これは、日本海洋レジャー安全・振興協会の主催、海藻おしば協会の指導で行われたものです。今回の6年生は、3年生の時に受けた海藻おしば教室に続いて、2回目の授業です。

まず、講師の高山先生から神奈川県のア藻についての話を聞いたあと、動画「ようこそ海の森へ」で、海藻や植物性プランクトンが作る海の森が果たす重要な役割について学びました。子どもたち神奈川県では380種類もの海藻が見られることに驚いていました。美しい海の森の映像に、「行ってみたい!」との声が上がっていました。

海の森が、海の水をきれいにしたり、海の生き物のすみかになっていたりするとともに、二酸化炭素を吸収する役割もあることも知りました。陸の森が吸収する二酸化炭素を「グリーンカーボン」と呼ぶのに対して、海の森が吸収する二酸化炭素を「ブルーカーボン」と呼び、その吸収量は陸の1.3倍もあるそうです。



続いて、万華鏡のキットを組み立てていきました。3枚の鏡を三角形に組み合わせて筒に入れ、底に乾燥した海藻を入れました。この海藻には高山先生が三浦市内の海岸で採集したものも含まれているそうです。完成した万華鏡を、光に透かして覗くと美しい模様が見えます。さらに、タブレットで写真を撮

撮ると、画面いっぱいに模様が現れました。子どもたちはくるくると変わる万華鏡の模様に大喜びでした。



国立教育政策研究所名誉所員の五島先生をお招きしました みうら学研究員会

6月5日(月)、みうら学研究員会が行われました。この会は採用2年目の教員がメンバーで、三浦市に関する教材を使用して授業を開発していくのが目的です。

第1回目は、共同研究者の五島政一先生(国立教育研究所名誉所員、元南下浦中学校教員)に講演をお願いしました。

先生からは、アースシステムについての説明があり、研究員は、それに基づいて授業を組み立てていくことになります。また、「教員は、楽しい授業をすることが大事、そのためには、教員自身にとって楽しい授業でなければ」と、熱く語られました。研究員は7月に先輩の研究授業を見学したのち、8月の研究員会までに、おおまかな授業の案を作ります。



みうら学・海洋教育に関するお問い合わせは、

学校教育課まで 046-882-1111 (内線404)

みうら学・海洋教育ネットワーク通信 NO.4

令和5年6月29日

諸磯漁港で藻場保全学習と釣り体験 アオリイカの産卵床も観察しました



6月6日(火)、名向小学校の1、6年生が諸磯漁港で藻場保全学習を行いました。4月27日のアオリイカ産卵床づくりに引き続き、みうら漁協諸磯支所に所属する漁業者等で構成する諸磯藻場保全活動組織が、(公財)日本釣振興会、(株)ヤマリアと協力して開催しました。



午前中は1年生が活動しました。まずは諸磯藻場保全活動組織の本間さんから藻場(海藻の群落)の役割や、磯焼け(藻場が無くなってしまう現象)についての話を聞きました。次に釣りと魚のタッチプールを体験するグループと、諸磯埼灯台の下で磯の観察をするグループに分けられました。タッチプールには、海藻を食べるブダイや、幼魚は海藻がちぎれた「流れ藻」に着いて生活するカワハギなど、藻場を利用する魚たちが泳いでいます。子どもたちは大きなシロザメやネコザメに驚いていました。磯の観察ではトコブシやムラサキウニ、アカウニなどが見られました。大きなショウジンガニを捕まえた子どももいます。いずれも海藻を食べる生き物で、磯焼けと密接に関わっています。



午後からは6年生の活動です。日本釣振興会の吉野さんから、ライフジャケットの使い方を教えてもらった後、1年生と同様、2つのグループに分かれ、釣りとタッチプール体験、磯観察を行いました。6年生の釣り体験では時合(魚が釣れる時間帯)に入ったのか、様々な魚が釣れました。クロホシイシモチやホンベラなどのほか、20センチほどのタカノハダイを釣り上げた子どももいました。釣りの合間には、船に乗って4月に作ったアオリイカの産卵床の観察にも連れて行ってもらいました。自分たちが頑張って作った産卵床に無事アオリイカが産卵していたことが確認でき、藻場がなくなってしまうとアオリイカが産卵場所に困っていることが体験をとおしてわかりました。最後に本間さんから、三浦半島の磯焼けの現状や、諸磯で見つかった早熟カジメの培養と養殖についてなど、藻場保全活動組織の取り組みを聞きました。子どもたちは熱心にノートを取り、実際に体験したことを含めて海の環境の変化や藻場の重要性を感じていました。



午後からは6年生の活動です。日本釣振興会の吉野さんから、ライフジャケットの使い方を教えてもらった後、1年生と同様、2つのグループに分かれ、釣りとタッチプール体験、磯観察を行いました。6年生の釣り体験では時合(魚が釣れる時間帯)に入ったのか、様々な魚が釣れました。クロホシイシモチやホンベラなどのほか、20センチほどのタカノハダイを釣り上げた子どももいました。釣りの合間には、船に乗って4月に作ったアオリイカの産卵床の観察にも連れて行ってもらいました。自分たちが頑張って作った産卵床に無事アオリイカが産卵していたことが確認でき、藻場がなくなってしまうとアオリイカが産卵場所に困っていることが体験をとおしてわかりました。最後に本間さんから、三浦半島の磯焼けの現状や、諸磯で見つかった早熟カジメの培養と養殖についてなど、藻場保全活動組織の取り組みを聞きました。子どもたちは熱心にノートを取り、実際に体験したことを含めて海の環境の変化や藻場の重要性を感じていました。

海業の考え方を取り入れた海洋教育について検討 みうら学・海洋教育推進委員会

6月2日(金)に、みうら学・海洋教育推進委員会が開かれました。

校長会代表の五十嵐先生(剣崎小学校)、教頭会代表の高橋先生(岬陽小学校)、海洋教育部会から南下浦中学校の藤原先生、剣崎小学校の多湖先生、旭小学校の高梨先生、そして教育委員会の職員が参加しました。高橋先生と高梨先生はリモートでの参加です。今年度の目標として「海業の考え方を取り入れた、海洋教育のコンテンツを開発していく」ことを確認しました。まずは「海業」とは何かを知ることから始めます。また、第12回海洋教育写真コンテストの内容について話し合いました。今年度も夏休み期間に合わせて開催しますので、たくさんの児童・生徒のご応募をお待ちしています。



みうら学・海洋教育に関するお問い合わせは、

学校教育課まで 046-882-1111 (内線404)

みうら学・海洋教育ネットワーク通信 NO.3

令和5年6月8日

砂浜に巨大生物が出現！南下浦小学校が全校児童で砂工作

5月24日(金)、三浦海岸の琴音磯の近くで、南下浦小学校の全校児童が砂工作を組みました。砂工作は、南下浦小学校の伝統行事で、1～6年生の縦割りのグループを合わせて作品を作ります。



事前に1グループ15～16名の6つのグループに各自デザインを考えて砂工作に臨みます。今年のエイ、タツノオトシゴ、シャチ、クジラ、メンダコ、ペンギングループのプラカードにデザインが描かれていました。6年生のリーダーは、下級生を引っ張って作品を完成させます。各グループには先生方も入り、子どもたちにアスをしていました。はじめはうっすらと輪郭が見えるですが、1時間ほどかけると少しずつ形が現れてきました。仕上げに貝殻や流木で模様を付けたら、すばらしい作品の完成です。最後に、完成した作品と一緒にグループで記念写真を撮りました。たくさんの保護者も見学に来ており、学校をあげてのイベントになっています。



作にグループが

分かれ、作品はンで、た。6せていドバイけです

「うみもんビンゴ」に挑戦！名向小学校が荒井浜で磯遊び



4月21日(金)、名向小学校の1・6年生が、遠足で荒井浜に行きました。

荒井浜に着くと、6年生が主導して進行をします。6年生は1年生が楽しめるように、手作りの「うみもんビンゴ」を準備しました。ルールの説明をした後、1年生と6年生の混合グループで生き物を探します。潮があまり引いていませんでしたが、転石の下や岩のすき間を探すと、小さなホンヤドカリやイソガニ、ヒライソガニなどが隠れていました。岩の表面には化石のように見えるヒザラガイ、砂粒を体に付けたヨロイイソギンチャクもあります。タイドプールでは、春の磯でよく見られる

メジナ(左下の写真)やアゴハゼの稚魚のほか、沖から迷い込んできたカタクチイワシ(右下の写真)を捕まえた子どもたちもありました。生き物ビンゴは、ウニやヒトデがなかなか見つからず苦戦していましたが、終盤に砂浜で生き物を探していた子どもが、砂地に住むヒトデの仲間であるモミジガイを見つけていました。1年生も6年生も、春の海を楽しみました。



みうら学・海洋教育に関するお問い合わせは、

学校教育課まで 046-882-1111 (内線404)

みうら学・海洋教育ネットワーク通信 NO.2

令和5年5月25日

名向小学校でアオリイカの産卵床づくり体験

4月27日（木）、名向小学校の6年生が校庭から伐採した木でアオリイカの産卵床を作りました。このイベントは、みうら漁業協同組合諸磯支所に所属する漁業者等で構成する諸磯藻場保全活動組織が、（公財）日本釣振興会、（株）ヤマリアと協力して開催したものです。



アオリイカは三浦の海にも生息する大型のイカで、食用や釣りの対象として人気です。春になると産卵のため沿岸の藻場（海藻の群落）にやってくるのですが、近年は植食生物や海水温の上昇等が要因となり藻場が減少しているため（磯焼け）、アオリイカの産卵場所も減っています。そこで、校庭に生えている木の枝を剪定し、海底に産卵場所を作ることになりました。まずはヤマリアの余田さんから、アオリイカの生態や磯焼けの話、産卵床についての講義を聞きました。6年生たちは校庭の木にも、産卵床に向いている木とそうでない木があることに驚いていました。授業が終わった

あと、間伐材で作った木札にアオリイカへのメッセージを書きました。次に、校庭に出て産卵床を作ります。諸磯藻場保全活動組織の本間さんに産卵床の作り方を聞き、子どもたちは持ち運べる大きさに木を切ります。切った枝を束ねて、メッセージを書いた木札をくくりつけたら産卵床の完成です。この産卵床は、本間さんや漁協のみなさんが海に運び、重りの土嚢袋を取り付けた後、諸磯湾に設置しました。子どもたちのメッセージがアオリイカに届き、たくさんのイカが産卵してくれると良いですね。



外洋から来た珍客、カツオノカンムリ

4月28日（金）、荒井浜にカツオノカンムリというクラゲが20個体ほど流っていました。笠の部分に硬い「帆」のような部分を持ち、波風に乗って外洋っています。体は美しい青色で、海面に浮いていると海の色に溶け込みます。まで強い南風が吹いていたので、海岸に流れ着いたのでしょう。強い毒を持つオノエボシや、硬貨のような笠を持つギンカクラゲも似たような生活を送りまカツオノカンムリには、カツオノエボシほど強い毒はありませんが、刺されるとや痛みが出ることもあるので注意が必要です。砂浜にはさまざまなものが漂着するので、観察をしてみると面白い発見があるかもしれません。



れ 着
を 漂
前 日
カ ツ
す。カ
腫 れ

みうら学・海洋教育に関するお問い合わせは、学校教育課まで
046-882-1111（内線404）

みうら学・海洋教育ネットワーク通信 NO.1

令和5年5月11日

剣崎小学校の子どもたちが江奈湾の生き物を観察しました

4月21日（金）、剣崎小学校の1・6年生が、学校の前に広がる江奈湾で生き物の観察をしました。6年生は何度も観察をしたことがある「いつもの海」ですが、1年生の子どもたちにとっては初めての体験です。6年生の担任の梅村先生に海の観察の注意



点を聞いた後、まずはみんなで並んで海を歩きます。潮が引いた海岸には、途中に滑りやすい岩場があったり、毒のあるアカクラゲが打ち上げられていたりしました。

6年生は1年生の子どもたちがケガをしないように手を繋いで一緒に歩きます。海の様子に慣れてくると「江奈湾のいきもの下じき」（右下の写真）を片手に、それぞれ生き物の観察に向かいます。6年生と1年生はペアで行動していて、「石の下を探すとカニがいるよ！挟まれないように触るには…」などと、生き物の探し方や捕まえ方を教えていました。春の海は



賑やかで、脚で泳ぐことができるイシガニやタイワンガザミ、ウミウシの仲間であるヤマトウミウシとその卵塊、まだ体が半透明の小さなヒラメの稚魚（左下の写真）や、地元の子どもたちに「びっこたん」と呼ばれているアゴハゼの稚魚などを観察することができました。初めは少し緊張していた1年生も、6年生の活躍で海や生き物のことが好きになったようです。



市学校教育研究会の海洋教育部会が開催されました

4月26日（水）、学校教育研究会の海洋教育部会が開催されました。部長は初声中学校の藪崎先生に決定しました。研究テーマは「海洋カリキュラムの開発」です。1年間よろしくお願いします。

みうら学・海洋教育推進委員は、旭小学校の高梨先生、剣崎小学校の多湖先生、南下浦中学校の藤原先生にお願いしました。また、先輩授業は岬陽小学校の宇都宮先生が引き受けてくれました。



みうら学・海洋教育に関するお問い合わせは、

学校教育課まで 046-882-1111（内線404）